

未来庭園の散策者のために

第4回オマージュ瀧口修造展はわが国のビデオアートの第一人者である山口勝弘さんをお願いした。モニターテレビ47台、レーザー発振器、ビデオカメラ、ミラー等を使って、当画廊に川、池、樹、それに遠景、窓まで含んだ庭園が出現する。題してビデオスペクタクル〈未来庭園〉。ビデオアートは当画廊にとっては初めての展示である。さてどのようなものになるか、興味深いところであったが、ヨーロッパ旅行から展覧会準備中のわが画廊へ直行して、入口に足を踏み入れた途端、画廊の余りの変貌振りに驚いた。この未来庭園の発する光の交叉に興奮を覚えた。「庭園の彼方」と題する作品の前に座っていると、何時の間にかこの世のものとは思えぬ一種SF的幻想空間に自分が漂っているのを感じるのである。

瀧口先生と山口勝弘さんとの長い交流の発端は1951年の「実験工房」に始まる。その間の事情は前掲の山口さんの文章にくわしいが、このことが今回のオマージュ瀧口修造展を山口勝弘さんをお願いした所以である。瀧口先生は「実験」という言葉を使われる。面白い言葉である。新しく生れてくるものに対する柔軟な姿勢、そして自らの実験的な試み、そこにぼくは瀧口修造の真骨頂をみる。

この未来庭園に独り座っていると、隣の椅子にフーと瀧口先生が座っていらっしゃるような気持になる。そこでぼくは先生に話しかける。先生お元気ですか？…………… ぼくは昨日、ロンドンから戻ったばかりです。…………… パリとバーゼルは暑く、ベルリンは寒かったです。…………… ぼくは先生にお話したいことが一杯あるんです。……………

瀧口先生が亡くなられてこの7月でまる5年になる。早いものである。いまや瀧口修造を追悼とするという雰囲気ではなくむしろ盃を挙げて賛えるという状況になってきているのをぼくは感ずる。この未来庭園で乾盃という風情である。展覧会期間中、瀧口修造に、山口勝弘に、そして現代美術に共感を持たれる多くの皆様が、この庭園で散策されんことを希っている。

最後にこの展覧会開催のためにご協力いただいた関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

1984年6月28日

佐谷画廊 佐谷和彦